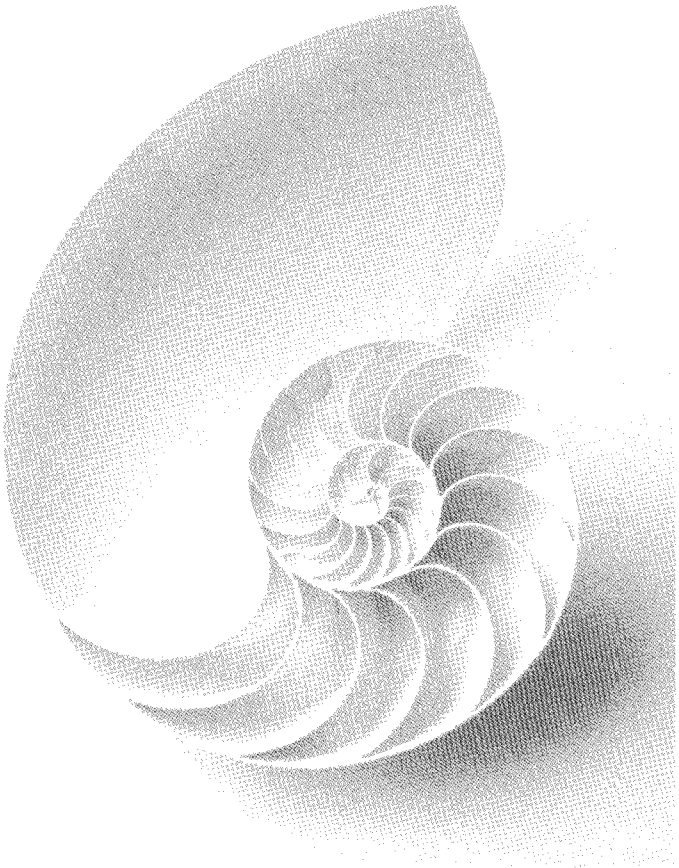
第３回

文窓賞優秀作品集



2009年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

第３回　文窓賞
学生レポートコンテスト 結果

最優秀賞

「空港の自動ドアを抜けて －海外旅行体験を通じて思うこと－」

高内 江梨子（社会学専修四回生）

優秀賞

「シアトル、そしてこれからの私」

河本 久葉（英米文学専修四回生）

「三千円もらって心が重くなった話」

田島 真（社会学専修四回生）

● 応募してくださった皆さん

梅田 紘輝	哲学専修	三回生
河野 奏	社会学専修	三回生
塚本 京平	社会学専修	四回生
三宅 陽平	哲学専修	三回生

（※あいうえお順）

◎ 選考会　2009年9月24日

◎ 選考委員

佐々木 衞 学部長

池上 淑子	日高 健一	鞍井 修一
花木 直彦	廣野 幸夫	西川 京子
武藤 美也子	田中 睦子	坂本 直樹

「空港の自動ドアを抜けて ～海外旅行体験を通して思うこと～」

文学部 社会学専修 四回生　高内 江梨子
Takauchi Eriko

何よりも好きな瞬間がある。外国へと降り立ち、空港の自動ドアを抜ける瞬間だ。大きな荷物を引きずりながら、私は汗と土と食べ物の混じった砂っぽい風を一身に受ける。日本ではけして嗅ぐことのできない臭いが鼻を突き、ざらついた外気が容赦なく肌に突き刺さる。その瞬間が大好きだ。「この国の風に歓迎されている」なんて思うことは絶対にない。日本以外の地を踏みしめた途端、私は容赦なく異邦人させられる。でも、それが好きだ。たまらなくわくわくする。外国にやって来たんだという実感がふつふつとこみ上げてくるから。

大学に入って、私は自分の趣味の項目に海外旅行を加えた。時間があるうちに今しかできないことを精一杯しておこうと思ったのだ。ヨーロッパ、アジア、オーストラリアと、今まで七カ国を訪れたが、あの一瞬の風を感じたくていつも飛行機や船に乗り込んでいた気がする。新聞を読んでもニュースを見ても、現地で実際に触れる一瞬の風には絶対にかなわない。本で得られるよりもずっと確かで手ごたえのある感覚がそこにはある。

これだけ情報が氾濫する現代でも「外国」はどこか遠い存在だ。アフリカの飢餓で何万人が亡くなったとか、名も知らぬどこかの国の誰かさんがノーベル賞を取ったとか、首相の誰かがこんな失態を演じたとか、そういった海外のニュースを私たちは驚くほど無関心に聞き流す。だって私たちの毎日はせわしなくて自分とは関係ない事柄に耳を傾けていられるような余裕はないのだ。もちろん、私だってそんな余裕のない人間の一人だ。色んなことを聞き流し、無視し、何の感慨もなく忘れ去っていく。でも、海外旅行へ行くようになってから、前よりも少しだけ、ほんの少しだけだけれど、世界で起きる様々なことを身近なものとして感じられるようになった。この世界のどこかで起きている全てのこと———飢餓も貧困も紛争もそうだし、何かの大会で優勝することや医療制度が充実することもそうだ———は、決して遠い話ではなく、例外なくこの日本でも起こりうることであり、私の身に降りかかるかもしれないことなのだと。

最近、そんな思いを一層強くする出来事があった。日本で安穏と暮らしている私の耳に一つのニュースが飛び込んできたのだ。新疆ウイグル自治区での動乱である。

新疆動乱の話をするために、私は二年前の旅行について語らなくてはいけない。珍しがられるのだが、私は新疆ウイグル自治区を実際に訪れたことがある。ＮＰＯ法人が企画した学生向けプログラムに一人で参加したのだが、なかなか体験できない貴重な旅だった。大阪港から船で二泊三日かけて上海に上陸し、そこから列車に乗り込み二日の車中泊を経てようやく新疆ウ

イグル自治区（内モンゴル）に辿り着く。内モンゴルでは放牧民の方が経営するゲルに泊まらせてもらった。

もっとも、これだけ聞いても、多分あなたは新疆について何も知った気にはなれないだろう。だからもう少しだけあそこがどんな場所なのか説明させてほしい。

新疆は自治区でありあくまで中国の一部だが、その文化や生活習慣は北京・上海とはまるで違っている。まず、生活の中心がイスラム教だ。都市には大きなモスクがあり、女性は頭にショールを巻いている。主食はナン。羊や麺なんかもよく食べる。葡萄の名産地で、市場には何十種類もの干し葡萄が山積みに並んでいる。土地が広大なので気候は各地によって違うが、私が泊まった草原のゲルは、昼間は半袖でも十分なのに、雨が降ると一気に温度が下がり、夜は息が白くなるような場所だった。

住んでいる人も様々だ。漢族、ウイグル族、カザフ族、モンゴル族などが混在している。町から町へと巡っていくと、それぞれの民族によって顔の違いも何となく分かってくる。浅黒い肌の人、中東系の人、頬の赤い人など、上海ではあまり見られない顔が多い。使われる言語も複数存在し、街では漢字も見られるが、よく目に付くのがアラビア語に似たウイグル文字。日本人には見慣れない曲線の文字が砂で固められた壁の上を躍っている。

この地の主な観光名所として挙げられるのは、ウイグル自治区博物館と国際大バザール。博物館では大英博物館もびっくりするほど保存状態のいいミイラが見られる。どのくらい状態がいいかと言うと、髪や爪、肌の刺青が残っている程だ。もし機会があれば、是非一度見に行ってほしい。エジプトのミイラと違って人気がないので、日本に出張することも中々なさそうだから。一方、国際大バザールは巨大な市場だ。各地から人が集まってきていて、庶民の日用品から観光客用のお土産物まで、ありとあらゆるものが手に入る。極彩色のショール、彫細工の入った鋭いナイフ、干した果物、帽子、靴、上着、ナンにビール、桃や瓜。上海と比べても随分物価が安いので気軽に買い物が楽しめる。ビール一瓶が５元（約８０円）、桃１キロ４元（約６５円）、１０元出せばきっちりと夕食が食べられる。

街全体の印象としては、上海や北京なんかよりもずっと貧しい土地だと思った。常に排ガスと土埃が舞っていて、くすんだ建物には毒々しい色の看板が立ち、道路の所々は崩れて破片になっていた。路上で売られる砂だらけの果物にはハエが止まっていて、自転車をこぐ人の靴は破れていて、お釣りで渡された５角はぼろぼろだった。

それでも———これだけははっきりと言えることなのだけど———活気は十分すぎるほど溢れていた。新疆の中心地であるウルムチは上海よりも汚くて雑多で貧しかったけれど、間違いなく熱気と活気に満ち溢れた街だった。夜にきらきらと光るネオンを見ていると、この街はこれからどんどん発展していくんだろうなとわくわくさせられた。それは発展を遂げきってしまった東京にも、大通りがすっかり整備された上海にもない力強さだった。

私が知っている新疆はそんな場所だ。誰が何と言おう、私がこの目で実際に捉えたのはそういう場所だったのだ。しかしながら、2009年、日本にいる私のもとに飛びこんできた新疆は以前とは全く違っていた。

新疆ウイグル動乱。新聞やニュースで目にした人も多いだろう。少数民族と漢族がにらみ合う写真や、警察や軍が町を練り歩く映像、女性活動家ルビア・カディア氏の顔は、遠く海を越

えた日本のマスコミも取り上げる騒ぎとなり、結局、胡錦濤主席がサミットをすっぽかす羽目になってしまった。

ニュースで途切れ途切れに伝えられる新疆の映像を眺めながら、私は「違う」と強く思った。これは違う、絶対に私の目にした新疆じゃない。こんなに道路が閑散としている訳がないのだ。店のガラスが割れて街中で火が噴いて警察車両が道路を占拠しているはずがないのだ。あの活気溢れた国際大バザールが一時でも閉鎖される訳がないし、あれだけ店がひしめき無数の人の行き交う道が、空っぽになってしまうなんて到底信じられなかった。

テレビの中に写る新疆は、恐ろしくて危険で得体の知れない煙に覆われていて、ちっとも魅力的なんかじゃなかった。私はそれがたまらなくショックだった。

全く不思議なことなのだけれど、人間は危険な場所はこれまでもずっと危険だったと思い込むものらしい。ルワンダは昔からずっと紛争にまみれていたと信じてしまうように、平和だったころのアフガニスタンなんて想像にも及ばないように。

でも実際はそうじゃなかった。

テレビに映る危険な場所は二年前まではごく普通の活気溢れた街だった。確かに私は旅行者であり、表面的なことしか見えなかった。水面下に火種がくすぶっていたんだと言われればそれまでだ。けれど、少なくとも私の訪れた新疆は命の心配をしなくちゃいけない場所じゃなかった。せいぜい市場を歩くときに、財布を掏られないよう気を付けるくらいだ。治安だってそんなに悪くなかった。でも、きっと今はもうそうじゃないだろう。

新疆のニュースを耳にするたびに、私は時折心配になる。市場で私からぼったくろうとしたショール屋の主人は、人懐っこい笑みを浮かべた売り子の少女は、農家で飼われていた土気色のラクダは大丈夫だろうか。ちゃんと元気でいるだろうか。暴動に巻き込まれていないだろうか。私の知っている新疆は、そういう普通の人たちが毎日着実に地に足をつけて生きているそんな場所だった。本当に信じられないことだけれど、突如として危険地帯に早変わりしたのはそういうごく普通の街だったのだ。

これは本当の話だ。だからこそ、私はここであなたに一つ考えてみてほしい。新疆であんなひどい暴動が起こるということは、この日本でも同じことが起きるかもしれないということなのだ。私たちの身にも同じことが降りかかるかもしれないということなのだ。

あなたには想像できるだろうか。見知っている街のファーストフード店のガラスが粉々になり窓から火が燃え盛ることを。斧や棍棒を持った男たちが道に溢れそのすぐ前に戦車が止まっているところを。顔見知りの店の主人や最寄り駅の駅員が血のついた道路の上に倒れているところを。

世界を身近に感じるということはそういうことだ。遠いどこかの土地で起きているあらゆることを、自分の身にも起こりうると感じることだ。「中国だからこんなことが起きたのだ」とか「あんな民族問題は日本にはない」とか理屈をつける前に、動乱で傷ついたかもしれないショール屋の主人について思いを馳せることだ。そして、そのショール屋の主人は今日あなたが立ち寄ったコンビニの店員と同じように、普通に生活している一人の人間なのだと想像することだ。

これは、私にとってもあなたにとっても非常に難しい。私だって未だに上手くできやしない。でも、試してみる価値はあるんじゃないだろうか。よければ是非一度、想像してみてほしい。数々の国際ニュースが「外国」ではなく、この「日

本」で起きている様子を。

世界を身近に感じるということ。自分にも起こることとして考えること。

数々の海外旅行を通して、私は新疆動乱と似たようなことを幾度も経験してきた。旅行を通じて得たものはそれこそ数限りないけれど、日本で平穏に暮らしている今、もっとも痛感するのはこの一点だ。

オーストラリアで出会った韓国人の女の子は「祖国に統一してほしい」と言った。私と同い年で国境に家族を分断されているわけでもなく、統一しても韓国は貧乏になるだけなのに、彼女はこう口にした。「だって一つの国だもの」。そのとき、私は初めて二つの国が同じ旗のもとオリンピックで行進したことの意味を知った。私が同じ立場になったら、はたして彼女と同じことが言えるのだろうか。

インドの車中ではガイドさんに「ここ、数日前に爆弾テロがあったところ」と窓外を指差された。ホテルからごく近い道路で、そのお陰かホテルはがらんとしていた。あのテロが数日ずれていたら私は今ここにいなかったかもしれない。

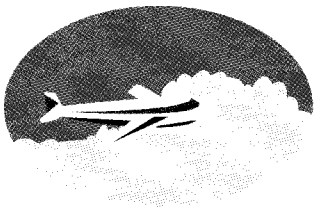
フランスでは「地下鉄はロマ（蔑称・ジプシー）の巣だから、スリに気をつけろ」と注意された。観光資源に恵まれた豊かな農業国の裏側を見た気がした。同時に移民が増えつつある母国でも似たような格差や差別感情が生まれつつあるのではないかと想像した。

一日だけ訪れたベトナムは、騒々しく道路中がスクーターとバイクで覆われた元気いっぱいの街だった。ガイドさんに言われた。「日本の復興も早かったでしょう。この国もベトナム戦争から立ち上がりつつあるんですよ」。かつて戦火に包まれた場所は今、より豊かに、より強くなろうと一心に進んでいる。その姿が高度経済成長期の日本と重なって、思わず応援したくなった。

今、あなたは海の向こうの世界にどんな思いを抱いているだろうか。憧れ、興味、妬み、悲哀、恐れ、そして無関心。様々な感情があることだろう。そのどれも間違いではないし、その全てが正しいことだろう。

ただ、一つ忘れてはいけないのは、望もうと望まざると、私たちはこの世界の一員なのだということだ。どれほど無関心でいようとも、どれほど疎もうとも、私たちは世界と無関係ではいられない。神戸のある日本のあるアジアがあるのは紛れもなく、この地球なのだから。だからこそ、少しでもいい、外国に興味を持ってみてほしいと思う。文化も言語も生活習慣も全く違うけれど、私たちと同じように感じ、同じように生きている人がいる。私たちと同じように勉強し働き、友人と遊び家族を大事にし、悲しいことがあれば泣き、嬉しいことがあれば笑う、そんな風に毎日を暮らしている人がいる。そう思えば、ぼやけた外国のイメージは確かに色づき、輪郭を持ってあなたに迫ってくるのではないだろうか。

空港の自動ドアを抜けて。その先の世界は、確かにあなたの足元と繋がっている。



シアトル、そしてこれからの私

文学部 英米文学専修 四回生　河本 久葉
Kawamoto Hisaha

薄暗い機内で乗客は皆寝静まっている中、私は目を覚ました。関西国際空港を飛び立って十数時間。体は疲れていたが、眠れなくなった。飛行機の小さな窓の外、遥か下に、初めて見る形の大陸があった。数時間後、私はそこに降り立つ。いまだかつてない興奮が、静かに、でも確かに私の内部を満たしていた。

2008年8月、アメリカ合衆国ワシントン州シアトル。きれいな海の見えるこの街で、一ヶ月間のインターンシップが始まった。

とにかく昔から英語が好きで、海外に興味があったため、異国情緒あふれる神戸の街の、留学生の多いこの大学の英文科を選んだ。大学生活は予想を遥かに超えて充実し、様々な人と出会い、授業はもちろん、課外活動やアルバイトにいそしみ、瞬く間に月日が流れ去った。気がつけば二年が経ち、折り返し地点に来ていた。数ヵ月後には就職活動も始まる。このままでいいのか。既に定職に就いている中学・高校時代の友人達をぼんやりと思い出し、学生という気ままで宙ぶらりんな自分の立場を思った。やりたいことはたくさんあるし、働くことや学ぶことへの意欲も人一倍あると自負していたのに、この焦燥感、虚無感は何なのだ。私は一体、大学に何をしに来たのだろうと、初めて疑問に思った。そんな矢先に見つけた募集要項だった。

「神戸大学海外インターンシップ派遣生募集」これから就職のことを考えなければいけない立場として、インターンシップは非常に魅力的であったし、また、私に最も不足していた英語の実践経験を積むチャンスである。すぐさま応募を決意した。

無事合格することが出来、喜んだのも束の間、他の派遣生二人と飛行機等の相談のため連絡を取り合い対面したのだが、私以外の二人はアメリカへの留学経験者だった。初海外で、言葉も心配なのは自分だけ……足手まといになるのではないかと早くも不安になった。しかし、選考でのエッセイに書いた意気込みや、面接でアピールした思いは負けない、何よりそれを評価されて合格出来たのだから大丈夫と自分に言い聞かせた。

英語については、独学では勉強しづらいこともあり会話が一番苦手だった。シアトル到着の翌日、三人でダウンタウンの散策をしたが、レストランに入っても、スターバックスで休憩しても、私には本場の会話は聞き取れないし答えられない。他の派遣生の手前、プライドもあり間違った英語を使うことが怖かった。事務所内では英語と日本語が半々だとはいえ、このままでは困る。そこで私は、翌日一人で街を歩き回ることにした。あちこち店に入り、市場に行き、とにかく人のいるところに入り浸り、周りの言葉に耳を澄ませ、積極的に自分から話しかけた。分からないと言うと肩をすくめられることも

あったが、簡単な言葉に言い換えたりゆっくりと発音してくれたりする人の方が多かった。言葉以外でもコミュニケーションは成り立つが、改めて言葉の偉大さを知り、もっと話したいと思うようになった。後日インターンシップが始まるときには、何か不思議な強さが備わっていた。

肝心のインターンシップ業務が始まるまでに私の胸は既にたくさんの驚きや喜び、初めての経験でいっぱいになっていたが、インターンシップの業務内容は予想以上に面白く、更に魅力的なものだった。派遣先の兵庫県ワシントン州事務所での私達の主な仕事は、九月の初めに行われる異文化交流促進イベント「秋祭り」に出展するブースの企画・運営だった。

チューターのジョンは簡単に秋祭りの概要説明をした後、ブースの内容はすべて自由で好きにやっていいから聞きたいことがあったら呼んでくれ、という言葉だけ残して、自室に引っ込んでしまった。まるごとぽんと任される大らかさに戸惑いながらも、私達はさっそく取り掛かった。

秋祭りは、東部日本祭協会（ＥＮＭＡ）が東シアトルの人々に日本文化を伝えるために開催しているもので、会場では、様々な団体のブース、屋台、パフォーマンスやワークショップなどのイベントが行われる。私達は事前に勉強してきた兵庫県の特徴や歴史、文化の知識をもとに、まずアイデアを自由に出し合い、それらをどう表現していくか話し合った。いくつかに案を絞り、所長にアドバイスを求めたところ、「伝統などにこだわる必要はなく、今の日本人がどのようなものの中でどのように生活しているか、コンテンポラリーなジャパニーズカルチャーを紹介すればそれで良い」と言われた。面白いものをやらなければ意味がないからだ。ただ伝統文化を並び連ねて、それが面白いと思うか？と問われ、そのときはなるほどと納得したが、これが予想外に難しかった。所長にはその必要はないと言われたが、兵庫県の事務所である以上、私達はなるべく「兵庫」を関連付けたかったからである。豊かで情報も簡単に手に入る現代、どこへ行っても同じことが出来、同じものがあるのだ。コンテンポラリーと兵庫を両立させるのは不可能に近かった。そのため、伝統は伝統として紹介し、兵庫は兵庫として紹介するというように完全に分けることに決めた。全体のコンセプトを「縁日」にして当日は浴衣を着ることにした。ブースを三つのセクションに分け、日本の有名な祭りを主に紹介するパネルコーナーと、習字体験コーナー、そして「Journey to Hyogo」と題した参加型のプレゼンテーションコーナーを作った。パネルコーナーでは、まずは人々の足を止めることが大切なので、季節が秋ということもあり、一角を大きく使って月見をモチーフに飾って目立たせ、祭り等の紹介も気軽に読めるようレイアウトを工夫し、文章もなるべく簡潔で分かり易いものにした。習字体験コーナーでは、来た人にひらがなでの名前の書き方を教え、書いたものを色とりどりの和紙に貼ったネームカードを作ってお土産に出来るようにした。そしてプレゼンテーションコーナーでは、兵庫県に旅行に行くという設定で、参加者自身が行き先を自由に選べて様々なツアーを体験できるプログラムを作成した。口頭での説明に加え、視覚的に楽しめるよう写真をふんだんに使い、とても華やかに仕上がった。このようにテーマを分けたことが、結果的には成功につながったようだ。縁日をコンセプトにしたのは、その独特の雰囲気がアメリカ人にとってはユニークだろうと考えたからで、伝統文化について祭りを取り上げたのは、その感覚が今の日本人の中にも根付いており、ジャパニーズな空気を感じられると考えたから

である。当日、私たちのブースは様々な年齢層の訪問者で賑わい、習字体験コーナーではたくさん用意していたネームカード用の和紙があっという間に無くなってしまい、忙しさに嬉しい悲鳴を上げたほどだった。とにかく楽しんでもらうことを目的に何度も何度も考え直し作り上げたのだから、嬉しさと達成感で胸がいっぱいだった。

ところが、この秋祭りの後に予想しない事態が待っていた。チューターからインターンシッププログラムの個人評価表を受け取ると、派遣生の一人の評価があまりにも悪くて、本人は勿論私も驚いた。彼女は一番英語も上手く、努力家で、パソコン作業能力もあり三人のうちで最も多く仕事をこなしていた。それは隣で働いていた私が一番よく知っていた。しかしその悪い評価には勿論理由があった。インターンシップ開始当時、シアトルの気温の低さと時差ぼけで体調を崩していた彼女は、私の目からも気だるそうに見えていた。チューターにもそう見えたのだろう。「体調が悪いのか？」と聞かれたのだが、彼女はいわゆる日本人の感覚で「大丈夫だ」と答えてしまったのだ。よけいな気を使って自分の状況を正直に言わない日本人の感覚はアメリカでは通用せず、ただ怠惰なだけだと思われてしまったのである。彼女の担当はパソコン作業が一番多かったので、パソコンを前に、しばしば疲れた目を休ませていたのだが、時々様子を見に来ていたチューターの目には「体調が悪くないのに何度も仕事中に寝ている」と映っていたのだ。チューターは私達の仕事に細かい口出しをしないで任せてくれたので、逆に彼女の仕事っぷりをきちんと見届ける機会も少なかったかもしれない。私は彼女を心底尊敬していたし、一緒に働けたことを本当に嬉しく思っていたので、とてもショックだった。悔しさ、理不尽さと社会の厳しさに、シアトルに来て以来ずっと張り詰めていた緊張の糸が切れて、二人で声を上げて泣いた。

だが、このままでは帰れない。私達は、アメリカで通用しない感覚で誤解を招いてしまったのなら、納得出来ない部分はアメリカ式に交渉をしようと思った。所長や他の職員の方にも相談をして、自己評価を提出し双方向のコミュニケーションによる最終まとめセッションを一人ずつ行うことになった。彼女がどう話をしたのかは分からないが、インターンシップ終了後の昼食会で、少しぎこちなくはあったが積極的にチューターと会話しようとする彼女を私は一層好きになった。

もうひとつ、私のシアトル滞在中のオアシスは、ホームステイ先のホストマザーだった。料理が上手で、ホストスチューデントと話をするのが大好きな Rochelle がいたからこそ、私のシアトル・デイズは実りあるものになったし、何より苦手だったスピーキングの練習が存分に出来、間違うことを恐れなくなった。帰国数日前、家に帰ると今日は星空がきれいだからとテラスに誘われた。海と緑に囲まれた、私のシアトルの家。満天の星空を見上げながら、Rochelle は日本に帰ったら話したいことがいっぱい出来たでしょう、とつぶやいた。たった一ヶ月足らずで起こったとは信じられないほどの、経験、感動、思い出たち。それらを通して私が得たもの、その思いを私は彼女に伝えようとした。しかし、走馬灯のように駆け巡るものたちに圧倒されて、何も言えなくなった。そんな私に Rochelle は、気持ちはちゃんと伝わっているから、またいつか戻ってきたときに話して、と微笑んだ。

帰国してもまだ心の一部がシアトルにあるような状況で夏休みも終わり、気付くと周りはもう就職活動を始めていた。私もその波に押され

て就職活動を始めたのだが、次第に違和感を抱き始めた。会社面接で、その会社で働きたい自分を押す力が不足していることを感じていた。当然うまくいかない。自分がやりたいことは一体何なのか。

キーワードは「人」だった。私は人が好きなのだ。シアトルでの事がこんなにも自分の中で熱いのは、すべてが人との交わりの中であったことだからだ。国境を越えて人とコミュニケートする面白さ、人に楽しんでもらいたい一心で何かを作る喜び……また私は大学入学当初から生協学生委員会に加わり、人が交わるイベントの企画運営にも携わってきた。私の過去は、人が原動力になっていた。そしてこれからも、私は人と交わる素晴らしさを人に伝えたいと思った。

多くの企業が本格的に採用選考を始める三月、私は一切の就職活動をやめた。そして、それに費やしていた時間とエネルギーを教員採用試験の勉強に注ぐことに決めた。民間の企業にも未練はあったが、私が熱くなれる仕事は教員だと思った。その後、母校での教育実習でも自分の出した答えが間違っていないことを確信出来た。更には、私自身が過去に魅力溢れる多くの先生方との出会いに恵まれていたのだということも再認識した。

大きな方向転換の後、猛ダッシュで駆け抜けた教員採用試験の合否結果は、まだ分からない。しかし、言葉の通じない異国の街を一人で歩き回ったときに得た不思議な強さは、何かあるごとにパワーアップして私の味方になっている。思うように行かないことは、それも生きる力になるのだ。

だめなら、またそこから歩き出せば良い。

三千円もらって心が重くなった話

文学部 社会学専修 四回生　田島 真
Tajima Shin

怠惰な学生だったと思う。たぶん今も変わっていないのだろうが。

僕が下宿先に近い、小さな個人経営の学習塾の講師としてアルバイトを始めたのは2年生のときだった。講師といっても、僕の仕事は解答書を見て子供のプリントに丸をつけ、時々生徒からわからない問題についての質問に答えるだけの作業で、はっきり言って仕事内容については特別に書いて発表できるようなことは今までなかったと思う。経営しているのは40歳くらいの女性の先生なのだが、子供のいる前ではまったく私的なことを話さないので、2年以上同じ教室で仕事をしているというのに、それ以外のことはほとんど知らない。まあ仮にM先生とでも呼ぶことにしよう。

その塾にはM先生と僕以外にも講師が二人いるが、どちらもM先生と同年代くらいの、僕から見たら「オバサン」としか言いようのない人達で、学生のアルバイトは僕一人だけだった。必然的にそういった他のスタッフの先生と話が合うわけもなく、むしろ教室の生徒を差し置いて「もう少し字を丁寧に」などとやんわり指導されるという場面も多々あった。その上仕事内容はさっきも書いたように、生意気盛りの大学生にとってはまったく面白みのない単純作業で、苦痛ではないものの、退屈であることは確かだった。まあ得てしてアルバイトとはそういうものなのであろう。そうでなくとも、僕はそれほど切羽詰ってお金が必要な種類の人間ではなかったので、自分の生活の中で、このアルバイトの占める精神的割合というのは最も低く位置していたように記憶している。

まあ色々能書きを垂れたものの、結論を急げば、僕は一度このアルバイトをサボタージュしたことがある、ということだ。怠惰な学生の僕にとって、その理由は一言でいい。それは「面倒くさかったから」だ。何か別の―その当時の僕にとっては大切な―理由があったような気がするが、思い出せないので結局大したことではなかったのだろう。

けれど、そんな理由が「キチンとした社会人の間で」認められるわけもないので、僕はうるさ型でなんとなく嫌味な性格をかもし出しているM先生でも、なにか納得できるような、堂々たる理由を作り出す必要に駆られた。そして、僕は古典的かつ大胆にも、「母親が死んだ」というウソの理由をひねり出したわけだ。

なぜこんな大げさな、後の処理でさらに面倒くさいことになりそうなウソをついたのか、その経緯はどうでもいい。大方、読んだばかりの漫画か小説にそういう描写があっただけのことだろう。それから、この偽装工作に関する倫理的、道徳的面からみた僕の後悔や反省も、この際どうでもいいので省略する。いずれにしろ、

僕は二週間のあいだ、堂々たる理由でサボタージュを満喫した後、たいした罪悪感もなく、さも当然のように出勤したのである。

M先生は随分同情(実際には僕の母は死んでいないのだから『同情』という言葉はおかしいような気がするが)してくれたように思う。僕は、あまり突っ込まれたことを聞かれるとウソが露呈しそうな気がしたので、前もって予想されていた質問や通り一遍のお悔やみの言葉に気のない相槌を打ちながら、内心はさっさと仕事を終わらせて帰りたい気持ちでいっぱいだった。

しかし、なぜかこの日に限って、採点するプリントの量が多く、結局僕はM先生と二人教室に残って仕事を片付けなければいけなくなった。プリントに丸をつけながら、相変わらず冷や冷やして曖昧な相槌を打つばかりの僕とは対照的に、その日の先生は、これまでにも、そしてこの後にもないくらい饒舌だったように思う。そして、先生の話は僕の予想もしなかった方向に転がっていった。それは「私の姉も白血病で死んだのよ。五年位前に」という意外な語り出しで始まったのだった。

ウソにしたところで、僕の場合死んだのは母だし、ましてその死因が白血病などとは一言も言っていないので、何が「私の姉“も”」なのかはわからないが、ともかくその時の僕にすれば、先生が一方的にしゃべってくれるのはむしろありがたかったので、黙って話の続きを聴くことにしたのである。なんだかんだ言いつつも、うそをつき通してしゃべることに、僕自身随分疲れてきていたのだった。それに、今までM先生のプライベートな面について何も知らなかった僕にとって、その話は単純に興味をそそるものでもあった。

かいつまんでその時の先生の話の要点を書くと、この個人塾ももともとは先生のお姉さんが経営していたものであるということ、そのお姉さんが白血病で亡くなって、五年前急遽M先生が教室を引き継いだということ、それまで子供の相手などしたことがなかったので、慣れるまで随分苦労したということ、などの事実が、M先生の上ずったダミ声で矢継ぎ早に語られたのだった。

自分のバイト先が、今日まで存外にドラマチックな経緯を辿っていること知って、多少の驚きを感じながら、相変わらず聴いているのかいないのかわからない相槌で僕は先生の話に応えていた。すると先生は、もう一つ僕にとって意外な事実を語ってくれた。

「ほら、あそこ(そういって先生が指差したのは、教室の入り口近くにあるスタッフ専用の物置棚だった)に置いてある写真も、写っているのは姉なのよ」

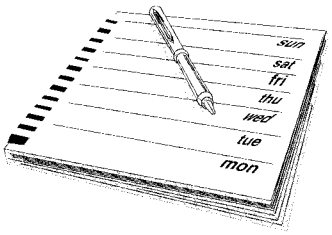
確かにそこに写真はあった。そして僕はこのバイト先に初めて来たときからその写真に気づいていたように思う。なぜなら、それは出勤時と帰宅時につけるタイムカードのすぐ上に置いてあったから。ただ、それまで僕はその写真を、M先生本人の若い頃のものだとばかり思っていた。さらに正直なところを言えば、教室の入り口近くに自分の写真を飾るのは少し悪趣味なんじゃないかなあ、とも思っていたのである。だからこの事実は、僕にとってM先生の印象をガラリと変えるほど印象深いものだった。なるほど、あの写真はこの教室の「創始者」のものだったのか。

「似てるでしょ」と聴かれ、「似てますね」と僕は返した。この日初めてまともな相槌を打った気がする。そして「昔はパッと見て見分けがつかないほど似ていてね」と、誰に言うでもなく先生はつぶやいたのだった。

その後も、取り留めのない会話が続いたが、内容はあまり覚えていない。プリントの採点が全て終わり、やっと帰れるという段になって、先生はおもむろに財布を取り出し三千円を僕にくれた。流石に申し訳ない気がしてかなり頑強に辞退したものの、「まあ面倒な話を聞いてくれた分の小遣いだと思って」と、無理やり押し付けられる形で結局いただいてしまった。こうなるともう詐欺罪で訴訟を起こされても文句は言えないな、と僕はかなりしょぼくれてしまった。先生の目をこれ以上見るのがなんだか重く感じられ、僕は足早に教室を後にしようしたが、先ほど話題になった写真がなんとなく気になって、タイムカードを押しながら、初めてそれをじっと観察した(といってもほんの数秒のことだったが)。

写真はシンプルで品のいい木製のフォトフレームによくなじんでいた。ヨーロッパ、おそらくはフランスのどこかだろう、ということくらいしかわからなかったが、石で作られた歴史的建造物をバックに、先生のお姉さんは随分やわらかい笑みを浮かべていた。なるほど、今まで気づかなかったが、確かによく見るとこれはM先生ではないな、ということが以外にも一目瞭然である。先生の笑顔はもっと固い。いや、それともこの写真が撮られた時点では本当に見分けがつかないほど似ていたのだろうか・・・。

帰り道、僕はなんとなく自分がついたウソの意味について考えていた。この時点になっても、僕は別段激しい自責の念に駆られていたわけではないし、気持ちの半分以上は「ウソがばれなくて良かった」という非道徳的な感情が占めていた。それでも、何か釈然としない気分の中で、とりとめもなく「人の死」とか「白血病」とか、そういう言葉が頭の中をぐるぐる回っていることだけは感じていた。だが、それだけだ。僕は、もらった三千円でいつもの定食屋に行くような鋼の心臓の持ち主でもなかったし、かといって今から引き返して「実は母が死んだというのはウソです！」と先生に告白して三千円を返しに行くようなできた人間でもなかった。結局はそのまま、時間だけが流れて、具体的に「僕はこの経験からこういうことを学びました！」と、文字にして断言できるようなことは何もないまま今に至る。サークルやゼミでの討論や就職活動、はたまた恋愛や旅行など、言い切りの文体でさわやかに自分の成長を語れる経験は、学生時代の間、僕も人並みにしてきたし、それをここに書いてもよかった。だけどそれ以上に、僕はあの日の先生との会話の内容やその中で感じたことを、思い出せる限り書き出して、自分の中で整理をつけたかったのだ。

今も僕は相変わらず怠惰で、自分を省みないだらしない生活を送っている。先生のお姉さんの話も、僕はそれっきり突っ込んで聞こうとはしなかったし、先生も進んで話すことはなかった。また、僕自身も自分のウソを告白することはなかったし、先生も―話題に触れることがはばかられたのだろう―僕の個人的な領域に立ち入ることはしなかった。そして、その後も1，2回ほど過去の反省もなくサボタージュを繰り返した(でっち上げるウソの内容は『風邪を引いたから』に変化したが)後、僕は一身上の都合であの個人塾のアルバイトを辞めてしまった。あの日の先生との会話は、自分の心にじんわりと黒い染みとなって消えずにいるが、それも「人間の死」や「ウソをついて人の同情を得ること」といった、解決まで程遠い、あるいはありきたりな答えしか出てこない哲学的テーマについて考えるきっかけになったに過ぎないし、そう何度も取り出して眺めたいと思う類の思い出でもない。それでも、あの日から後、先

生との会話に影響された、何か特筆するような僕の行動を一つあげよと言われるならば、それはせいぜい、白血病の支援活動をしているさい帯血バンクに、三千円ほどの寄付金を振り込んだことくらいだろうか・・・。